

川端康成選集 第三卷

雪 國

昭和31年2月21日 印刷
昭和31年2月25日 發行

川端康成選集

第三卷

(第二回配本)

雪

國

定價 二六〇圓
地方賣價 二七〇圓

著者 川端康成

發行者・東京都新宿區矢來町

七一 佐藤亮一 印刷者・東

京都千代田區神田神保町三ノ

二三 塚田重 印刷所・塚田

印刷株式會社 製本・加藤製

本所 *落丁・亂丁本はおとりかえいたします。

發行所

株式會社 新潮社

東京都新宿區矢來町七一
電話東京三四局七一—八番
振替東京 八〇八番

目次

雪	國		五
イタリヤの歌		一五九	
童	謠		一七九
死體紹介人		二九	
散りぬるを		二六九	

雪

國

雪

國

國境の長いトンネルを抜けると雪國であつた。夜の底が白くなつた。信號所に汽車が止まつた。

向側の座席から娘が立つて來て、島村の前のガラス窓を落した。雪の冷氣が流れこんだ。娘は窓いっぱいに乗り出して、遠くへ叫ぶやうに、

「驛長さあん、驛長さあん。」

明りをさげてゆつくり雪を踏んで來た男は、襟卷で鼻の上まで包み、耳に帽子の毛皮を垂れてゐた。

もうそんな寒さかと島村は外を眺めると、鐵道の官舎らしいバラックが山裾に寒々と散らばつてゐるだけで、雪の色はそこまで行かぬうちに闇に吞まれてゐた。

「驛長さん、私です、御機嫌よろしうございます。」

「ああ、葉子さんぢやないか。お歸りかい。また寒くなつたよ。」

「弟が今度こちらに勤めさせていた。だいてをりますのですつてね。お世話さまですわ。」

「こんなところ、今に寂しくて參るだらうよ。若いのに可哀想だな。」

「ほんの子供ですから、驛長さんからよく教へてやつていただいて、よろしくお願ひいたします。」

ますわ。」

「よろしい。元氣で働いてるよ。これからいそがしくなる。去年は大雪だったよ。よく雪崩れてね、汽車が立往生するんで、村も焚出しがいそがしかったよ。」

「驛長さんずるぶん厚着に見えますわ。弟の手紙には、まだチヨツキも着てゐないやうなことを書いてありましたけれど。」

「私は着物を四枚重ねだ。若い者は寒いと酒ばかり飲んでゐるよ。それでごろごろあすこにぶつ倒れてるのさ、風邪をひいてね。」

驛長は官舎の方へ手の明りを振り向けた。

「弟もお酒をいただきますでせうか。」

「いや。」

「驛長さんもうお歸りですか？」

「私は怪我をして、醫者に通つてゐるんだ。」

「まあ。いけませんわ。」

和服に外套の驛長は寒い立話をさつさと切り上げたらしく、もう後姿を見せながら、
「それぢやまあ大事にいらつしやい。」

「驛長さん、弟は今出てをりませんか？」と、葉子は雪の上を目捜しして、

「驛長さん、弟をよく見てやつて、お願いです。」

悲しいほど美しい聲であつた。高い響きのまま夜の雪から木魂して來さうだつた。

汽車が動き出しても、彼女は窓から胸を入れなかつた。さうして線路の下を歩いてゐる驛長に追ひつくと、

「驛長さあん、今度の休みの日に家へお歸りつて、弟に言つてやつて下さあい。」

「はあい。」と、驛長が聲を張りあげた。

葉子は窓をしめて、赤らんだ頬に兩手をあてた。

トラッセルを三臺備へて雪を待つ、國境の山であつた。トンネルの南北から、電力による雪崩報知線が通じた。除雪人夫延人員五千名に加へて消防組青年團の延人員二千名の出勤の手配がもう整つてゐた。

そのやうな、やがて雪に埋れる鐵道信號所に、葉子といふ娘の弟がこの冬から勤めてゐるのだと分ると、島村は一層彼女に興味を強めた。

しかし、ここで「娘」と言ふのは、島村にさう見えたからであつて、連れの男が彼女のなのであるか、無論島村の知るはずはなかつた。二人のしぐさは夫婦じみてゐたけれども、男は明らかに病人だつた。病人相手ではつい男女の隔てがゆるみ、まめまめしく世話すればするほど、夫婦じみて見えるものだ。實際また自分より年上の男をいたはる女の幼い母ぶりは、遠目に夫婦とも思はれよう。

島村は彼女一人だけを切り離して、その姿の感じから、自分勝手に娘だらうときめてゐる

だけのことだつた。でもそれには、彼がその娘を不思議な見方であまりに見つめ過ぎた結果、彼等らの感傷が多分に加はつてのことかもしれない。

（もう三時間も前のこと、島村は退屈まぎれに左手の人差指をいろいろに動かして眺めては、結局この指だけが、これから會ひに行く女をなまなましく覺えてゐる、はつきり思ひ出さうとあせればあせるほど、つかみどころなくぼやけてゆく記憶の頼りなさのうちに、この指だけは女の觸感で今も濡れてゐて、自分を遠くの女へ引き寄せるかのやうだと、不思議に思ひながら、鼻につけて匂ひを嗅いでみたりしてゐたが、ふとその指で窓ガラスに線を引くと、そこに女の片眼がはつきり浮き出たのだつた。彼は驚いて聲をあげさうになつた。しかしそれは彼が心を遠くへやつてゐたからのことで、氣がついてみればなんでもない、向側の座席の女が寫つたのだつた。外は夕闇がおりてゐるし、汽車のなかには明りがついてゐる。それで窓ガラスが鏡になる。けれども、スティムの温みでガラスがすっかり水蒸氣に濡れてゐるから、指で拭くまでその鏡はなかつたのだつた。）

娘の片眼だけは反つて異様に美しかつたものの、島村は顔を窓に寄せると、夕景色見たさといふ風な旅愁顔を俄づくりして、掌でガラスをこすつた。

娘は胸をころもち傾けて、前に横たはつた男を一心に見下してゐた。肩に力が入つてゐるところから、少しいかつい眼も瞬きさへしないほどの眞剣さのしるしだと知れた。男は窓の方を枕にして、娘の横へ折り曲げた足をあげてゐた。三等車である。島村の眞横ではなく、

一つ前の向側の座席だったから、横寝してゐる男の顔は耳のあたりまでしか鏡に寫らなかつた。

娘は島村とちやうど斜めに向ひ合つてゐることになるので、ぢかにだつて見られるのだが彼女等が汽車に乗り込んだ時、なにか涼しく刺すやうな娘の美しさに驚いて目を伏せる途端娘の手を固くつかんだ男の青黄色い手が見えたものだから、島村は二度とそつちを向いては悪いやうな氣がしてゐたのだつた。

鏡の中の男の顔色は、ただもう娘の胸のあたりを見てゐるゆゑに安らかだといふ風に落ちついてゐた。弱い體力が弱いながらに甘い調和を漂はせてゐた。襟巻を枕に敷き、それを鼻の下にひつかけて口をぴつたり覆ひ、それからまた上になつた頬を包んで、一種の頬かむりのやうな工合だが、ゆるんで來たり、鼻にかぶさつて來たりする。男が目を動かすか動かさぬうちに、娘はやさしい手つきで直してやつてゐた。見てゐる島村がいら立つて來るほど幾度もその同じことを、二人は無心に繰り返してゐた。また、男の足をつつんだ外套の裾が時時開いて垂れ下る。それも娘は直ぐ氣がついて直してやつてゐた。これらがまことに自然であつた。このやうにして距離といふものを忘れながら、二人は果しなく遠くへ行くものの姿のやうに思はれたほどだつた。それゆゑ島村は悲しみを見てゐるといふつらさはなくて、夢のからくりを眺めてゐるやうな思ひだつた。不思議な鏡のなかのことだつたからであらう。鏡の底には夕景色が流れてゐて、つまり寫るものと寫す鏡とが、映畫の二重寫しのやうに

動くのだつた。登場人物と背景とはなんのかかはりもないのだつた。しかも人物は透明のはかなさで、風景は夕闇のおぼろな流れで、その二つが融け合ひながらこの世ならぬ象徴の世界を描いてゐた。殊に娘の顔のただなかに野山のともし火がともつた時には、島村はなんともいへぬ美しさに胸が顫へたほどだつた。

遙かの山の空はまだ夕焼の名残の色がほのかだつたから、窓ガラス越しに見る風景は遠くの方までもものの形が消えてはゐなかつた。しかし色はもう失はれてしまつてゐて、どこまで行つても平凡な野山の姿が尙更平凡に見え、なにもものも際立つて注意を惹きやうがないゆゑに、反つてなにかぼうつと大きい感情の流れであつた。無論それは娘の顔をそのなかに浮べてゐたからである。姿が寫る部分だけは窓の外が見えないけれども、娘の輪郭のまはり絶えず夕景色が動いてゐるので、娘の顔も透明のやうに感じられた。しかしほんたうに透明かどうかは、顔の裏を流れてやまぬ夕景色が顔の表を通るかのやうに錯覺されて、見極める時がつかめないのだつた。

汽車のなかもさほど明るくはなし、普通の鏡のやうに強くはなかつた。反射がなかつた。だから、島村は見入つてゐるうちに、鏡のあることをだんだん忘れてしまつて、夕景色の流れのなかに娘が浮んでゐるやうに思はれて來た。

さういふ時彼女の顔のなかにともし火がともつたのだつた。この鏡の映像は窓の外のともし火を消す強さはなかつた。ともし火も映像を消しはしなかつた。さうしてともし火は彼女

の顔のなかを流れて通るのだつた。しかし彼女の顔を光り輝かせるやうなことはしなかつた。冷たく遠い光であつた。小さい瞳のまはりをぼうつと明るくしながら、つまり娘の眼と火とが重なつた瞬間、彼女の眼は夕闇の波間に浮ぶ、妖しく美しい夜光蟲であつた。

こんな風に見られてゐることを、葉子は氣づくはずがなかつた。彼女はただ病人に心を奪はれてゐたが、たとへ島村の方へ振り向いたところで、窓ガラスに寫る自分の姿は見えず、窓の外を眺める男など目にも止まらなかつただらう。

島村が葉子を長い間盗見しながら、彼女に悪いといふことを忘れてゐたのは、夕景色の鏡の非現實な力にとらへられてゐたからだつたらう。

だから彼女が驛長に呼びかけて、ここでもなにか眞剣過ぎるものを見せた時にも、物語めいた興味が先きに立つたのかもしれない。

その信號所を通るころは、もう窓はただ闇であつた。向うに風景の流れが消えると、鏡の魅力も失はれてしまつた。葉子の美しい顔はやはり寫つてゐたけれども、その溫かいしぐさにかかはらず、島村は彼女のうちに澄んだ冷たさを新しく見つけて、鏡の曇つて來るのを拭はうとしなかつた。

ところがそれから半時間ばかり後に、葉子達も思ひがけなく島村と同じ驛に下りたので、彼はまたなにか起るかと思分にかかはりがあるかのやうに振り返つたが、プラツト・フオウムの寒さに觸れると、急に汽車のなかの非禮が恥しくなつて、後も見ずに機關車の前を渡つ

た。

男が葉子の肩につかまつて線路へ下りようとした時に、こちらから驛員が手を上げて止めた。

やがて闇から現はれて來た長い貨物列車が二人の姿を隠した。

宿屋の客引きの番頭はちやうど火事場の消防のやうなものものしい雪裝束だつた。耳をつつみ、ゴムの長靴をはいてゐた。待合室の窓から線路の方を眺めて立つてゐる女も、青いマントを着て、その頭巾をかぶつてゐた。

島村は汽車のなかのぬくみがさめなくて、そとのほんたうの寒さをまだ感じなかつたけれども、雪國の冬は初めてだから、土地の人のいでたちに先づおびやかされた。

「そんな恰好をするほど寒いのかね。」

「へい、もうすつかり冬支度です。雪の後でお天氣になる前の晩は、特別冷えます。今夜はこれでもう氷點を下つてをりますでせうね。」

「これが氷點以下かね。」と、島村は軒端の可愛い氷柱を眺めながら、宿の番頭と自動車に乗つた。雪の色が家々の低い屋根を一層低く見せて、村はしいんと底に沈んでゐるやうだつた。「なるほどなににさはつても冷たさがちがふよ。」

「去年は氷點下二十何度といふのが一番でした。」

「雪は？」

「さあ、普通七八尺ですけれど、多い時は一丈を二三尺超えてますでせうね。」

「これからだね。」

「これからですよ。この雪はこの間一尺ばかり降つたのが、だいふ解けて來たところです。」

「もういつ大雪になるか分りません。」

十二月の初めであつた。

島村はしつこい風邪心地でつまつてゐた鼻が、頭のしんまですつといちどきに通つて、よごれものが洗ひ落されるやうに、水漬みづばながしきりと落ちて來た。

「お師匠さんとこの娘はまだゐるかい。」

「へえ、をりますをります。驛にをりましたが、御覽になりませんでしたか、濃い青いマントを着て。」

「あれがさうだつたの？——後で呼べるだらう。」

「今夜ですか。」

「今夜だ。」

「今の終列車でお師匠さんの息子が歸るとか言つて、迎へに出てゐましたよ。」